日本歯科医史学会々誌・第3巻
第3号通巻11号・昭和51年3月

顎関節脱臼の疾病史

谷津三雄* 中川圭介**
藤井敏博*** 武藤優子****

緒言

口中書のみならず，救急法書や養生法書また瘍（外）科書のなかに落架風という今日の顎関節脱臼の記載がみられる．一方この処置法としてヒポクラテス法があり，この名の示すごとく洋の東西を問わず顎関節脱臼は古くからあり多くの治療法（救急処置法）があったと思われる．

栗原順庵著「洋漢病名一覧[1]」（正編，明治11年3月出版，後編，明治12年4月出版）の「落花風」の項に「訳書ニ下顎脱臼ト謂フ両側脱臼スルアリ，偏側脱臼スルアリ其因ハ俄然トシテ失笑シ或ハ欠伸シ又ハ頰ヲ打撃スルヨリ脱ス，案ズルニ此関節ハ下顎骨ノ尖起側頭骨ノ関節窩ニ嵌接ス．此窩甚タ寛ク且ツ浅シ然ラザレハ上下ノ機転左右ノ施廻自在ナラズ由ツテ架上ニ物ヲ載スルカ如ク脱落シ易キヲ以テ漢ニ落架風ト名ツク，風ハ俄ニ発スル病患ノ名トス」とあって落花風はまた落架風とも書くし，また落下頰，頰差とも記載されている．

また落合泰蔵著「漢洋病名対照録[2]」（上下2冊合して1巻，明治16年5月初版，同17年再版）には落架風—おとかいのかきがねのはづれるもの又あごはづれる—Luxatio mandibulae—下顎脱臼と解説されている．一方現在においても顎関節脱臼の患者に遭遇しその整復が困難で時に手こずる症例もある．以上の見地から定義（病名）と治療法を中心にその疾病史をしらべ口腔外科史と救急蘇生史の一端とすべく本研究を企画した．

研究成績

1. 神保等菴玄州著：外科衆方規矩[3]．初版は貞享2年（1685）で75年後の宝暦10年（1760）に再刻されていることと外科精義，外科発揮，外科精要，外科正宗など10種類の外科書から外科的救急疾患とその治療法を抜抄し，脳頸部（巻之一，26丁），胸腹部，臀腿部（巻之二，26丁），手足部，遍身部，急救諸方（巻之三，29丁），中毒部，誤呑部，諸瘡図（巻之四，21丁），灸鍼熨部，敷洗薫割薬，去汚化毒薬，生肌斂口薬，諸般神膏（巻之五，18丁），主方（巻之六，26丁），主方（巻之七，22丁）の7巻が合して全1冊，かたかな交り，和綴（8×12.5 cm）178丁で，この目次から代表的な外科的救急書であったと考えられる．

巻之一に落架風の項があり「飲酒ニヨリ或ハ大ニ笑或呵欠（カゲン）シ，下脛（カキヤウ）落テ合架スルコトアタハズ．是気血行ズ，筋収サルナリ，針ヲ頰車，下関ニス，手ニテ托上（オシアケ）テ内ニ防風荊（ハウフウケイ）芥恙（カイキャウ）活細辛（クハツサイシン）當帰，尾白芷，姜虫甘（キャウチウカン）草節（サウフシ）煎服ス．又方，先，車前草ノ煎水ニテ口ヲ洗又含両手ニテ接下（モシオロ）シ即拍上（ウチアグ）レハ合コト神ノ如シ」とあり，刺針の取穴を頰車，下関にとる針療法に薬物の併用療法を行なっているが，当時としては止むをえない処置とはいえ，これらのみでは上手に整復しえなかったであろう．そこで又法にみるような用手的整復法については「合コト神ノ如シ」と表現し整復しえたときの実感がこもっている．なお，本書の「耳瘡」の項に「合架風」（カツカフウ）があり「合架風ト云ハ両

The History of Mandibular Dislocation
*Mitsuo Yatsu **Keisuke Nakagawa
***Toshihiro Fujii ****Yuko Muto
Department of Anesthesiology, Nihon University School of Dentistry, Matsudo
(Director: Mitsuo Yatsu)

ノ耳ノ下ニ一核紅腫ヲ生ズルヲ云，牙関緊閉口開カレズ剪刀ニテ推ヒラキ地黄散ニ紫證散ヲ合シテ，煎ジ竹管ニテ灌入」とあり合架風とは急に発生した牙関緊急に対しての用語であろうか．

2. 多紀安元丹波元悳著[4]：準官刻「広恵済急方」，寛政2年（1790）刊で上，中，下の3巻よりなる．その中巻の48～49丁の脱頷（あごはづれなり）の「病状」に「人口を大に開て笑或は欠をしそこなひて頷がはづれ……口を合すことならざるなり」とあって，大笑とあくびをあげている〔療法〕に「其人に酒を酔ふほどに飲ませて睡たる中に皂莢の末を鼻孔の中へ吹入嚏をさせて自然に復」は今日でいう全身麻酔下における筋弛緩下の治療で単に“くしゃみ”だけの整復よりは進歩がみられる．

また「患人の体を柱に凭（より）かからせ頭をおしつけて動かぬ様にし，身を平にして安坐せしめ，外（ほか）の人正面に向ひ両手の大指を口の内へ入れ槽牙（おくば）の上端を捺（おさ）へ下頰を托住之一先手前の方へ引下却て急に持擧向の向へ一拍子に送上ておし込み開竅の所へ投べし，以後に絹木綿の類にて頰と顚とへ兜置（まきおく）こと半時許なしてよし……かかるときに指をくひ切るほどのことあるなり」と全く今日と同じ顎関節の前方脱臼に対する整復法と下顎包帯法及び注意とが記されている．

更に「凡（おおよそ）脱頷，肩骨脱骨臼の類速に療治せざれば復りぬる者なり，はやく瘍醫を迎べし」の瘍医を整形外科医とすれば今日においても適応されかつこの考え方は脱臼に対する整復術の鉄則である．しかし，この用手的整復法に対しては「右の法古人伝る所にして最良方也，然ども是は術なれば手に覚えざりしは漫に施し却てなおざりあらん……医者を迎えて理せしむるに如はなかるべし」の注意がきが記されているのは本書は素人向きのためであろう．

また。「一度脱頷しあれば其後大に笑又は欠するとき幾度も脱すなり」と習慣性脱臼をまた「面を側方へ向けて欠をするときは脱すなく心会の為玆に記す」と欠伸のときの注意が記されている．

3. 平野元良（革谿，道人重誠）著[5]：ことぶき草，原名病家須知（ビャウカココロエグサ）合刻坐姿必研（トリアゲババココロエグサ）和綴大冊，18×26 cm ひらがな交り，全8冊（図1）

図1

巻之一：養生の心得　54丁
巻之二：食物能毒の親験　39丁
巻之三：小児を養育べき用意　43丁
巻之四：婦人平素の裁量　35丁
巻之五：黴毒，肥前瘡の毒　45丁
巻之六：傷食霍乱の心得　55丁
巻之七：坐姿必研の上冊　43丁
巻之八：坐姿必研の下冊　34丁

巻之一より巻之四までは

古と婦記草，原名病家須知の表題が記され，天保2年（1831）9月22日の自誌と天保3年（1832）秋の刊行で巻之一の表紙の扉には病家須知合刻坐姿必研，全部8冊，天保壬辰（3年）季秀新鐫と記され，また巻之五と巻之六の表題はことぶき草原名病家須知であるが巻之五の扉には広福大五賜号，古登婦き草，原名病家須知とあり，天保6年後編刻成と記され更に巻之七と巻之八の表題にはことぶき草，原名坐姿必研と記され，巻之七の扉

図 2

には「とりあげばばこころえぐさ一名坐婆必研，天保5年新鐫」と記されている．即ち本書は病家須知巻之1～巻之4までの前編と巻之5と6の後編に坐婆必研の巻之7と8の計8冊よりなる今日の家庭看護書で特に巻の7と8は助産婦編と考えてよい．

巻之六の「全瘡打撲の心得を説」の項には多くの包帯法の記載の他に48～50丁に「落架風（アゴノハズレタル）を治する法」が図解説明されている（図2）。

「欠（アクビ）などしてふと頰車骨（アゴノホネ）の脱たる……其術はその人に対（ムカヒ）て両手の大指を口裏（クチノウチ）へさし入て牙関盡處（ズットオクバノウヘ）を樽（オシ）て余（ノコリ）の四指（シホンノユビ）を以て下顎を棒（ウケ）おこし拽出（ヒキイダ）す状（キミ）にて口裏（クチノオク）へさし入たる指頭にて牙関上（オクバノウヘ）より顎を強く下の方喉頭（ノド）へ向て突下る（ツキサゲ）やうにすればその機転（ハズミ）にくりけもなく納鈎（カカル）なり……ただ此術を施（スル）にはその口裏（クチノウチ）に入たる大指を嚙傷（カマ）るることのあらば疾速頰（ハヤクアゴ）の方へ脱（ハヅス）ばかりが爛熟（ナレ）ごとなり故に俗家（シロウト）には初（ハジメ）より指頭を楮帛（カミ）など，布などで纏裏（ツツミ）たるが，たとえ嚙まれても傷損（ケガスルコト）なくて可なり，故にこの落架風（アゴハズレタル）を治するにその腮（アゴ）を手巾（テヌグヒ）にて頭上へ縛て紙條（コヨリ）を鼻中へ挾（サシコミ）て嚏（クッサメ）せしむるも，また腮（アゴ）をくくり枕を高くして仰臥（アオニネサ）せその傍より不意に枕を蹴かへして治する等の俗伝（シロウトワザ）も皆これを前へ引よせてかくりといふ機転にて自整頓（シゼンニカカラ）しむるはずの術なり」と記されてある．

4. 本間玄調著：「瘍科秘録[6]」天保8年(1837) 12月刊の巻四之下の「打撲損傷」の項（58～64丁）に落架風の記載があり「打撲損傷ハ整骨科トテ別ニ専門ニナリ一子相伝ト称シ人ヘモ伝ヘズ，又人ニモ学バス家ニ伝フル所，一方ノ散薬ノミヲ奇験ノ有ヤウニ自ラ信ジ其術ハ拙キコトナレトモ専門ノコトナレバ世人ハ上手ノヤウニ心得，打撲損傷ナレバ必ズ其門ニ就テ療治ヲ請フコトニナリタルハ本邦ノ舊習ナリ．今若シ其学ヲ講究シ其術ヲ研精シテ整骨ノ妙ヲ得ルモ遽（ニハカ）ニ人ニ知ラルルコト難シ，但ウチタルヲ打撲ト云ヒ，接續（ツガイ）ノヌケタルヲ脱臼ト云ヒ，骨ノ折タルヲ折傷ト云ヒ，クジキタルヲ閃挫トイ上各因ニテ外候ノ異ルモノナレバ得ト骨骸ヲ明ニスベシ」と骨折，脱臼，捻挫に対する総論的な内容の記載につづいて「落架風ハ又頰車蹉，落下頦，脱頷等ノ別名アリ，乃チアゴノハヅレルナリ，第一欠（アクビ）或ハ失笑（ヲホワラヒ）等ニテ脱ルコトアリ，或ハ中風大酔等ニテモ脱ルルコトアリ，是ハ筋ノ緩ミタルナルベシ一度脱ルト癖（クセ）ニナリ数脱（シバシバハツ）ルルモノナリと習慣性脱臼についてもふれていて，また。治法，先ヅ患者ヲ端坐セシメ医患者ノ前ニ就テ蹲踞（タテヒザ）ニナリ左右ノ拇指ニ綿布（モメン）ヲ巻キ患者ノ口中ニ入レ槽歯（ヲクバ）ヲ緊シク推シ下ケ中指食指ニテ頤（ヲトガイ）ヲ急ニ推シ上ゲル寸ハ乍ニ入ルモノナリ，癖（クセ）ニナリテ数脱（ヌケ）ルモノハ補中益気湯ヲ久服スベシ」とあって今日とほとんど同じ用手的整復を第一にあげているのは本書は外（瘍）科医を対象としたもののためであろう．大成湯，和経湯（乳香，没薬，川芎，牡丹，芍薬，白芷，地黄，当帰，甘草，右水煎服，治一切打撲損傷）などの煎服，楊拍散の外用薬の他に麻沸湯の記載があり整復困難な例には和経湯や麻沸湯などの全身麻酔を使用しているの

は華岡青洲の高弟であることを考えれば当然のことであろう．

5. 水野沢斉義尚：朱雀経験，養生辨後編，巻之上[7]．養生辨は 15×22 cm，和綴，ひらがな交りで上巻45丁，中巻51丁，下巻44丁の3冊よりなり，上巻の序文は天保12年（1841），下巻は天保13年（1842）の初春刊とその他別に後編があり，上巻42丁，中巻46丁，下巻35丁の3冊で嘉永4年（1851）刊，計6冊よりなる．後編巻之上は全文42丁よりなり目録は，◦頭之辨初丁，◦面之辨6丁，◦髪之辨8丁，◦髭鬚之辨9丁，◦眼之辨11丁，◦睫眶之辨16丁，◦眉之辨17丁，◦鼻之辨21丁，◦耳之辨25丁，◦口之辨28丁，◦唇之辨30丁，◦歯之辨31丁，◦舌之辨35丁，◦額頤之辨38丁でこの最後に「附落架風之コト」が記載されている．

〔養生〕：「頤の外たるを落架風といふ．架は字書に棚なりと有，頤を棚に表し其棚が落しと云意なるべし．◦風は風邪にあらず，急におこる病をいふ，中風，驚風など皆今まで無病の躰が卒に病を発したるを云．落架風も今まで何事もなかりしが外ると急に詞も別らず飲食もならず．故に風の字を用ひたるなり」とその字義について説明し，「又頤の骨は斯の如き形にして，耳の下にて上膊の枢に掛りて其上より筋膜が纏ふ也，然に故ありて纏ふたる筋膜が攣急すれば彼の枢が外れるなり，是を落架風といふ」と下顎骨の解剖図を掲載して説いている．

その「治落架風法」は椒目又は瓜帯にてもよし，右一味細末にして煙管竹の如き管に盛置き，図の如く病人の膝をたて，其上へ肘を載せ左右の手掌にて外たる頤を堅くもちて動かざる様にし，彼の管の中の薬を鼻より吸入ば，嚏の出る拍子に治るなり」と図解説明しているが（図3），立てた両膝に両肘を立てくさめをした瞬間にその反動でかっくんと整復ができるとはまことに面白い記載で，しかもこれが養生書に附としてでていることは当時この落架風で悩んだ人も多くいたであろう．

6. 英医合信（ホブソン）著．三宅良斉飜刻[8]：西医略論（安政5年，1858刊）全漢文，和綴，

図 3

17.5×25.5 cm，上・中・下の3編よりなるが中編は上・下2巻のため計4冊である．

中編の巻之上に脱骨論が19～33丁にあり総編的事項につづき「下牙牀骨ノ交節（フシ）」でその成因に「因跌打或因暴笑或因呵欠」をあげ，前方脱臼，後方脱臼，両側脱臼，片側脱臼などの種類と「不能開合，不能言語，不能飲食，涎水横流，更有左右岐尾俱脱者，口開不合」とその症状をあげている．「治法医者以両大指入病者口内，大指先用布條纏束防脱骨還原時猛力咬傷也，切顴牙盡處圧之使下餘指托頦牽引使前然後向後一送即置入原窩」として既述した日本古来の医書に記されていると同様な母指を使用しての用手的整復法即ちヒポクラテス法が記載されている他に「以木一根横切顴牙盡處 以代大指圧力與指相似，但不如用指」として指を口内に入れないで復する即ち槓杆法が18丁に「牙床骨脱治法」として図解されている（図4）．この槓杆法はその創始者の名をとりアンブロアース・パレー法とも言われている．

考　証

香月牛山著，天明2年（1782）刊の「牛山方考[9]」の巻之上の12丁に「欠伸ノ時不謹或ハコトニ触テ躁動シテ腮鑷（アゴノセキカネ）脱落スル

図 4

者アリ，名付テ落架風ト云，又頷車蹉トモ名付ク．行気香蘇散二木香ヲ加テ奇効アリ，楊梅皮ノ細末ヲ鼻に吹入レハ嚏ルルヲ得テ必ス癒也可秘」とあり，楊梅皮の細末を鼻の孔へ吹入れると誰れでも必ず嚏（くさめ）のために起る頭部の劇しい動揺と共にがっちり旧に復するという．

また多紀元簡著「救急選方[10]」（初版，享和元年（1801），再版文化7年（1810）刊）の卒暴諸証の項の「落下頰」或は「落架風」の治法に落下頰拿法として「患者の身を平かにして正坐せしめ両手を以て下顎を托（オ）し佳（トド）め左右の大指を口内に入れ，槽牙の上端を捺（オ）して下顎を緊（シ）め，力を用ひて肩上に往いて関竅を捺し開き，脳後に向って送り上せば，即ち関竅に投ずべし，随って絹條を用ひて頰を頂上に兜し，半時許（バアリ）にして之を去れば即ち癒ゆ（外科正宗）．凡そ伸欠して頰車蹉（クヒチガ）ひ但々開いて合すること能はざるには酒を以て之に飲まして，大に酔はじめ睡中に皂角（サイカチ）の末を吹きて其の鼻を搐し，嚏して透れば即ち自ら正し（三因方）．笑うて下頰を脱せるには，線（イトスヂ）を用ひて綿毬二箇を纏ひ，左右の牙床の後を塞ぎ，手を用ひて托上して妙なり（壽域神方），按ずるに一度脱頷する時は，其の後大に笑ひ，又欠伸に際して幾度も脱することあるべきも，面を側方に向けて笑ひ，又は欠伸するときは此の憂ひ無し」とあり，「広恵済急方[4]」とほとんど同じ内容が漢文で記されている．口中書の整復法は口伝とするものが多いが，薬を鼻より吹き入れてくさめをださせた瞬間に治する法や患者平身正座し術者は左右大指を患者の口に入れて云々と，西洋におけるヒポクラテス法とわが国においてはその出典を外科正宗にもとめられるものが多い．またはずれた直後は整復容易であるが2～3日を経過すると難かしく，かつ腫れてくるといい，その場合「細辛，当帰，木通，木瓜，甘草，蘇木，陣皮，荊芥，楊梅皮を水蒸して含む．車前草を煎じ酢を加へ含む．地黄，生姜を酒粕で加温蒸す．車前草を生でもみ青汁を加え袋に入れて蒸しあてる．楊梅皮粉を鼻に吹き入れるなどの法で処置した後に整復すれば可能であると口伝している．また滑稽な方法[12]に患者を二，三尺の高さの処に立たせ，自身に両手を以て両顎を下から正しく抑えさせ，一気に其辺から跳下りさせるとその際の身体の躍動と手の支えとが相俟って，必ずかっくんと復旧すると言う．

寛政5年（1973）[12,13]に刑屍した人体を解剖して骨と関節の精巧さを知り，それを木で模造した木骨を墓府医学館に献じたことによって，杉田玄白，桂川甫周，大槻玄沢らを驚嘆せしめた広島の名医星野良悦が若い頃，良悦の伯母が落下頰をおこし，良悦とりあえず整復を試みるも失敗，常に親しき数名の名医に交々治を乞うたが皆整復しえず．

その頃土地の瘍科の田中道長は特に手術の精妙さをもって名をなしていたが眼に一丁字も無き男のため日頃，良悦らの新進から軽蔑視されていた．しかし良悦らは整復しえないのだからこの際頭を下げて治を請うた．道長は平生良悦達から軽侮されていたので内心，快からずと思っていた矢先だったからこの時とばかり横柄に構えて診をなした．そして愈々治療にかかろうとした時，急に人払いを命じ良悦はもとより下女一人の同席さへ阻んだ．良悦は隣室で一体どういう術を施すならんと襖を細目にあけて窺い片睡をのんだ，道長は

それを知ったか患者を座敷の一遇に誘いて薬籠を解くと，その風呂敷で己れの頭とともに患者に被せ，「良悦をして其手法を観せしめず一術即ち治す.」良悦これを憤り「カクノ如キ症ハ内景ヲ知ルニ非ズンバ手ヲ下スベカラズ，内景ハ親ラ解剖スルニ非ズンバ其詳ヲ極ムル能ハズ」とこの落下顎の失敗例が彼の晩成を為した発憤の動機となり，藩に請ひ刑屍を得て解剖をして検し，機関連接の状即ち関節の解剖を詳かにし木骨を創製したのである．このエピソートを考証するに眼に一丁字なき瘍科医田中道長が果して内景を明らかにしていたものか，甚だ疑わしいことで，おそらく数多き経験が道長をして斯くの如き妙術を会得せしめたのであろう．

結　語

「外科衆方規矩」「病家須知」「広恵済急方」「瘍科秘録」「養生辨後編」「西医略論」「牛山方考」「救急選方」などの古医書から今日の顎関節脱臼即ち落架風の原因，症状，処置などの疾病史は次の如くである．

1.　落架風，落花風，落下頦，頦蹉，頬車蹉，脱頷などの別名があるが，いずれも急におこった“あごはずれ”のことで今日の顎関節脱臼である．

2.　原因の第一に欠伸，或は失笑をあげついで打撲，また習慣性脱臼，両側脱臼，片側脱臼の記載もみられる．

3.　症状は突如として起る開合，言語，飲食，咀嚼などの不能と口唇の閉鎖不十分のため口角よりの唾液の流出（涎水横流）は今日の口腔外科書の記載と全く同じである．

4.　処置は薬を鼻より吹きこませて生じさせた“くさめ”の瞬間に整復する方法に，針や内服の併用が多い．一部，酒や麻沸湯を使用している．

5.　母指を下顎臼歯部に当て下方に圧迫しつつ後方に押すいわゆるヒポクラテス法は外科正宗にその出典を求められるが，西医略論にも全く同じ法の記載のあることから洋の東西を問わず最初に試みられた用手的整復法と考えられる．

6.　槓杆法即ち術者は患者の直後に立ち患者の頭部を胸部に当てて固定した後約1横指大の木片を上下顎の臼歯内に深く横に挿入し，術者は下から頤部を強く且つ急激に上方に持ちあげる，この際口の中に入れた木片の辺縁を患者の後ろから助手に両手で強く下方に圧迫させて行なう槓杆の理で整復する法は今日のアンブロアース・パレー法で西医略論にその記載がみられる．

文　献

1) 栗原順庵：洋漢病名一覧．正編，明治11年（1878）3月刊，後編，明治12年（1879）4月刊．
2) 落合泰蔵：漢洋病名対照録．明治16年（1883）5月初版，同17年（1884）再版．
3) 神保等菴玄州：外科衆方規矩．貞享2年(1685)初版，宝暦10年（1760）再刻．
4) 多紀安元丹波元悳：準官刻，広恵済急方．寛政2年（1790）
5) 平野元良（革谿，道人，重誠）：ことぶき草．原名，病家須知合刻坐婆必研．天保3年(1832)～天保6年（1835）
6) 本間玄調：瘍科秘録．天保8年（1837）
7) 水野沢斉義尚：朱雀経験，養生辨．後編巻之上，嘉永4年（1851）
8) 英医．合信著，三宅艮斉飜刻：西医略論．安政5年（1858）
9) 香月牛山：牛山方考．天明2年（1782）
10) 多紀元簡（安長）：救急選方．享和元年（1801）初版，文化7年（1810）再版．
11) 山田平太：落架風（下顎骨脱臼）歯学史料．医歯薬，昭和42年（1967）
12) 高橋道史：落架風．漢方の臨床第12巻，第9号，542～543，昭和40年（1965）
13) 佐藤三吉：日本外科全書巻一．139ページ，大正3年（1914）